世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Effects of Improvisational Music Making on Cross-age Group

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長坂, 希望 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/737

即興的音楽づくりの考察

～異年齢交流活動としての可能性を探る～

The Effects of Improvisational Music Making on Cross-age Group

長坂希望*
NAGASAKA Nozomi

Ⅰ　はじめに

都市化や核家族化、少子化の進展などの社会状況を背景に、子供たちの生活はめまぐるしいほどに変化を遂げている。かつて野山や公園、校庭を大勢で走り回って遊び、友人と語り合い、他人と協力し合うといった多様な人間関係の中で社会性や対人関係能力を身につけていた子供たちは、今や友人と共にいてもゲーム機やパソコンの前で一人一人が黙々と遊ぶ時間が増え、友人や他者と語り合う時間は減少している。これらの変化は子供たちの体験不足や人間関係の希薄化、社会性の育成の不十分さを生み、地域や家庭、教育現場で問題視されるようになって久しい。幼稚園や保育園、小中学校でも子供の社会性の育ちを促進するために様々な取り組みを行っている。その一つに異年齢交流活動がある。国立教育政策研究所総括研究官である滝（2006）は、年齢相応の規範意識や協調性などを身につけてこない子供の増加に対する学校の役割について、構成的グループエンカウンターやカウンセリング、心理学の理論に基づく手法やスキル訓練の類が関心を集めていることを紹介し、それらの限界を論じた。彼は子供の社会性について「大勢で遊ぶ、友人と語り合う、他人と協力し合うといった多様な人間関係の中で社会性や対人関係能力を身につける機会が減った」という問題の「最も自然な解決法は『そうした機会を増やすこと』に他ならない」と言い切り、社会性の基礎として子どもたちが自己有用感を持てるようになることが重要である、とした。そして、異年齢間や地域との活動を意図的・計画的に組むこと、そして教師のかかわり方の見直しを提案している。異年齢の交流活動は①子どもが「活動の中心＝主体」となって課題や問題に取り組み、それらを達成・克服していける機会を準備すること。そして、自己有用感は他者とのかかわりから子ども自身が感じ取るものであり、教師から直接与えられるものではないため、②教師は子どもに任せて「支える」「見守る」裏方に徹することが必要だと述べた（p.29−30）。

以前、筆者は学童保育において小学１～３年生の異年齢集団を対象にドラムサークルという即興的な音楽づくりの活動を行った（2012）。共に演奏し音楽を共有するという体験を重ねる中で子供たちが他者への興味や尊敬、尊重を示し、社会性を身につけていった過程はまさに滝の述べた教師や指導員、筆者という大人が「子どもに任せ、支え、見守る裏方に徹し」、「子どもが主体

*武蔵野大学教育学部兼任講師

となり」音楽づくりという「課題に取り組み」「それらを達成」する異年齢の交流活動であった。この経験を基に筆者は教育現場だけではなく地域の中で子供たちの育ちを支える一助となるために「夏休み・自然体験＆親子ドラムサークル」を企画、実施した。本論文では参加する子供の年齢を０歳から11歳までに広げて親子の即興的音楽づくり、ドラムサークルを行い、①主体的に取り組める交流活動の準備、②他者とのかかわりから感じる自己有用感、③大人のかかわり方、の３点から異年齢の交流活動としての可能性を検討したい。

Ⅱ　方法：即興的音楽づくり～ドラムサークル～

１）ファシリテーテッド・ドラムサークル

ドラムサークルとは、広義では人々が集まりドラミングを行うことを指す。 人類は古代より様々な文化の中で集い、輪になり、音楽や歌、踊りや物語を用いてコミュニティを健全なものに保ち結束力を強めていた。しかし、近年世界各地で一般的に「ドラムサークル」と呼ばれているのは、この特定文化の音楽の形式やルールにのっとった方法で行われるドラムサークルではなく、ファシリテーターが案内役をつとめるファシリテーテッド・ドラムサークルを指すことが多い。

今回筆者が用いた即興的な音楽づくりのドラムサークルとは、アフリカや南米、世界各地の打楽器をサークル状に集った参加者全員が即興的に演奏して一つの音楽を作るファシリテーテッド･ドラムサークルである（写真1）。ファシリテーテッド･ドラムサークルを発案･開発したアーサー・ハル（1998）は著書「ドラムサークル・スピリット」の中でドラムサークルのことを「人びとがリズムや音楽的表現を分かち合う、全員完全参加型のイベントです。これらの経験をとおして、参加者間の調和や仲間意識、心身の健康がもたらされます。」と記している（p.25）。



（写真１）

２）ファシリテーター

ドラムサークルでは、参加者全員がサークル状になって打楽器を演奏するため、複数の音やリズムが重なり合って聞こえる。ドラムサークル・ファシリテーターは、グループ全体が自立して

音楽づくりを行えるように参加者の意識や精神状態等を促進する役割を担う。参加者はファシリテーターの指示に従いながら、グループの奏でる異なる音やリズムの重なりに耳を傾けること、他者とのリズムでのやりとり、自分らしい打楽器の奏法などを身につけ、少しずつ自分でリズムや音を聞きながら音楽を即興的に奏でられるようになる。演奏者が互いの音を聞きながら自由に音楽を作れるようになるにつれ、ファシリテーターは一参加者として集団と共に音楽づくりをするようになっていく。

ファシリテーションについて、音楽療法士でありドラムサークル・ファシリテーターでもあるクリスティーン・スティーヴンス（2003）は、参加者が不安を感じないように打楽器の基本的な奏法を示す「teaching without teaching（教えないで教えること）」が重要であるとし、楽譜を使用せずモデリングをして真似してもらう方法（リズムエコーまたはまねっこ）やコール＆レスポンス（問答）、比喩的な指導法、様々な文化での伝承法を参考にして言葉を使ってリズムパターンや音色を教える方法を紹介している（p.49−50）。またハル（1998）は、ファシリテーターという教師が、輪になって集う生徒にドラムレッスンという指導を行い続けると、参加者は指導されることを求めて教師に依存するグループになってしまうことを示唆している。そしてドラムサークルを通じて参加者が調和や仲間意識、心身の健康を手にするためには、参加者が自分たちの音を互いによく聞きあうことを学び、集団が自立していくプロセスを経験することが必要であることを強調している。

3）使用楽器〜4つの音色別楽器群〜

ドラムサークルでは楽器の音色をタイコ類、木の楽器、金属の楽器、振る楽器の4種類に分類して打楽器を用意する。そして、4種類すべての音色がアンサンブルの中で程よく聞こえるように、それぞれの楽器群から異なる種類の楽器を複数個ずつ使用する。

①　タイコ

タイコと言えば、動物の皮などで作った薄い膜を木や金属で作った胴（枠）に張り、それを叩いて出す楽器のことを指す。タイコは古くから存在する楽器のひとつで、世界各地に特色のある楽器が分布している。ドラムサークルでは西アフリカのジェンベやアシーコ、南米ブラジルのチンバウやスルド、タンタン等、手で叩く打楽器を主に使用する。また数多くのタイコを必要とする場合には、高音域、中音域、低音域の3種類に分類してそれぞれのバランスをみながら使うことが多い。和太鼓や大太鼓、ドラムセットのように音の大きな打楽器は音量の調整をしなければ他の打楽器の音をかき消してしまいアンサンブルが成立しないこともあるため、使用の際には音が大きくならない工夫や細心の注意を払う必要がある。また、参加人数が多い場合には全体の音量を考慮してタイコを演奏する人達には手で叩いて演奏をしてもらうことが多いが、子供や高齢者、慣れていない演奏者にはバチやマレットを渡して演奏してもらうこともある。

アンサンブルの中では、響きのある豊かな音を奏でるタイコだが、中でも重低音のスルドやタンタン、バイーアドラムなどはアンサンブルの要となることが多い。そのため、これらの楽器はファシリテーターやテンポをしっかりとキープできる人がバチやマレットを使って演奏し、全体の演奏をリードしたり、支えたりすることが多い。

②　木の楽器

木でできた楽器には、ウッドブロックやクラベス、スリットドラム、木琴、ギロ等がある。響きの豊かなタイコの音に対し、木の楽器は余韻が少なく時計がカチコチと鳴るような全体の中でもリズムを刻む音を奏でる。

③　金属の楽器

金属から作られた楽器には、カウベルやアゴゴベルのような短い音を出す楽器と、トライアングルやエナジーチャイム、マンジーラやシンバルのように、長く音を保持する楽器がある。短い音を出す楽器はどの楽器よりも音が響き目立つため、アンサンブルをリードしやすい。長く音を保持する楽器は全体の音楽に雰囲気や「色」を付けやすい。

④　振る楽器

シェイカーやマラカス、ジングルなどは「シャカシャカ」という音のする楽器で、振る楽器に分類する。振る楽器は木の楽器が刻むリズムや、タイコや金属の楽器が響きや余韻のある音で奏でるリズムの間を埋めるような細かな音を鳴らす。

Ⅲ　異年齢集団でのドラムサークル

異年齢集団でのドラムサークルは「夏休み・自然体験＆親子ドラムサークル」の参加者と行なわれた。この自然体験と音楽のキャンプは、日常生活から離れた場所で親子が自然や打楽器に触れて交流することを目的に海辺の施設にて開催された。参加者は2泊3日間寝食を共にし、海辺を散策したり、シャボン玉をしたり、浜辺でサンドクラフトを行ったり、キャンプファイヤーや海水プールでの水泳、水遊びを行った（表1）。参加者は大人も子供も活動や食事の準備や片づけを共に行うことも活動の一部として「みんなで作るキャンプ」というテーマにのっとり、それぞれがアイディアを出し合いながら過ごした。そして、希望する子供たちは宿泊学習さながらに親とは別の部屋で共に寝泊まりし、スタッフや親が見回り、見守りを行った。様々なプログラムは、乳幼児や持病を抱えている子供も参加していたため、必要時には遠慮せず昼寝、休憩を優先するように伝えた。

表1

日	活動	内容
1日目午後	①　オリエンテーション	代表挨拶、スタッフ紹介、施設の使い方を学ぶ
	②　ウェルカムドラムサークル	室内にて全員で音楽づくり
	③　海辺散策 & シャボン玉	シャボン玉グッズを持参し海辺、浜辺で遊ぶ
	④　夕飯	準備、食事、片付けを全員で行う
	⑤　お楽しみ会	自己紹介タイム、子供部屋の部屋割り相談
	⑥　入浴	大浴場にて入浴
	⑦　消灯・就寝	子供部屋が落ち着くまでは大人が見回り＆見守り

2日目午前	① 朝の体操＋海辺散歩	広場にて体操後、海辺へ移動し散歩
	② 朝食	準備、食事、片づけを全員で行う
	③ ドラムサークル	2日目のみ参加のメンバーも加わっての音楽づくり
	④ 昼食	準備、食事、片付けを全員で行う
	⑤ サンドクラフトor昼寝	浜辺で大きな船を砂で作成し、記念撮影 or 休憩
	⑥ 海水プール	水泳、水遊び
	⑦ 夕食	準備、食事、片づけを全員で行う
	⑧ キャンプファイヤー	スタッフが準備し、火を囲んで歌、ダンス
	⑨ 入浴	大浴場にて入浴
	⑩ 消灯・就寝	子供部屋が落ち着くまでは大人が見回り＆見守り
3日目午前	① 朝の体操＋海辺散歩	広場にて体操後、海辺へ移動し散歩
	② 朝食	準備、食事、片づけを全員で行う
	③ バイバイ・ドラムサークル	海の見えるピロティにて最後の音楽づくり
	④ 退所点検 & 退所	シーツ等の片付け、部屋の掃除後、 施設の方にチェックしてもらい、退所。

(1) ドラムサークルを行った場所

青少年の心身の健全な育成のための県立社会教育施設内
研修室（第1回目、2回目）とピロティ（第3回目）

(2) ドラムサークルの時間と参加者

参加した子供の年齢は0歳9か月児、1歳児が1名ずつ、2歳児2名、3歳児2名、５歳児1名、6歳児2名、7歳児2名、8，9，10，11歳児各1名の合計15名。大人は子供たちの両親や両親の友人19名が参加した。スタッフはファシリテーターを含めて4名だったが、記録係の1名を除き3名は活動に参加した。第2日目のみキャンプに参加した子供4名と大人3名がいたこと、体調の都合で昼寝や休憩、途中参加をしていた人もいるため、各回の参加人数は異なっている。

第1日目　1時間半　　子供 8 名　大人11名
第2日目　2時間　　子供15名　大人18名
第3日目　1時間15分　子供10名　大人14名　がドラムサークルに参加した。

(3) 使用楽器

今回は最年少の0歳9か月の子供から大人まで、どの年齢の参加者も自身の表現に適した楽器を選べるように、発達段階と音を出すために必要な手の操作性を考慮して楽器を選択、使用した(表2)。また、子供達が自然な形で交流できるように遊びの要素を加えようとドラムサークルの基本の4音色別楽器群に加えて、おもちゃやユニークな音の出る楽器群を設けて5つの楽器群から楽器を用意した。

① タイコ群

- ジェンベ7本
- アシーコ1本
- フレームドラム5個(16,14,12,10,8インチ)
- トゥバーノ1本

- 丸、三角、半円、正方形、長方形と異なる形のサウンドシェイプ
- タンタン２本
- バイーアドラム１本
- キッズジャンベ１本
- キッズタム１本

ハンドドラムは写真２（手前よりジェンベ、タンタン）のようにある程度身長のある子供や大人は椅子に座り足の間にはさんで、小さな子供（１歳児）は立って演奏することができた。また、低年齢の子供たちが扱いやすいように小さめなタイコ、キッズタム（写真３）やキッズジャンベ１本ずつも用いた。室内での演奏では全体の音量を考慮して、ベースを奏でるタンタン２本とバイーアドラム１本以外のタイコは、手で演奏してもらった。



（写真２）



（写真３）

②　木の楽器群　③　金属の楽器群　④　振る楽器群

木、金属、振る楽器は、異なる大きさや重さ、形などにこだわり、複数個ずつ用意した。

≪木の楽器≫

- ギロ
- カエルギロ
- クリケットギロ
- カスタネット
- クラベス
- スリットドラム
- マトラカ（ラチェット）
- キツツキ型ウッドブロック

≪金属の楽器≫

- カウベル
- アゴゴベル
- トライアングル
- メルヘンクーゲル
- エナジーチャイム

≪振る楽器≫

- フルーツシェイカー（リンゴ大、リンゴ小、オレンジ、バナナ、アボカド、プラム、レモン、洋ナシ）
- エッグシェイカー
- タオル地でできたガラガラ
- 鈴
- チャフチャス（木の実マラカス）
- マラカス

⑤　おもしろい音の楽器・おもちゃ群

赤や黄、青色や透明で中が見える等の視覚に訴えやすい楽器･おもちゃ、コミカルな音、変わった音のする楽器やオモチャを用意した。

- オーシャンドラム（カラフルなビーズ入り）
- 鳴き笛の入った犬とカエルのぬいぐるみ（写真4左）
- 透明でプラスチックの中に仕掛けの入ったグラビティスティック（写真4中央）
- 赤や黄色の蛇腹になったゴムがついているクワックスティック（写真4右）
- スプリングドラム



（写真4）

木、金属、振る楽器、おもしろい音の楽器やオモチャの音を出すために必要な手の操作は表の通りである。

表2

手の操作	楽器・おもちゃ
①片手で押す・握って離す	鳴き笛入りぬいぐるみ、クワックスティック（ゴムの部分）
②片手・両手で叩く	タイコ類
③片手で保持して振る	フルーツシェイカー、エッグシェイカー、鈴、ガラガラ、マラカス、メルヘンクーゲル、クワックスティック、チャフチャス
④片手で保持してまわす	マトラカ、スプリングドラム
⑤片手で保持、別の手で叩く	タンバリン、フレームドラム、サウンドシェイプ、カスタネット
⑥片手で保持、別の手でバチ等を持って叩く	フレームドラム、サウンドシェイプ、カウベル、クラベス、アゴゴベル、トライアングル、エナジーチャイム
⑦片手で保持、別の手で紐を引っ張る	キツツキ型ウッドブロック
⑧片手で保持、別の手でバチ等を持って擦る	ギロ、カエルギロ、クリケットギロ

⑨両手で保持、 楽器を傾けて鳴らす	レインスティック、オーシャンドラム、グラビティスティック

(4) 分析の対象

分析の対象としたのは次の２種類の資料である。

①　活動中の写真　260枚

②　活動の一部分を撮影した動画　10本（合計約30分）

(5) 活動中の様子

【第１日目】

１－①　第1日目のドラムサークルは、参加者が施設に集まってすぐ、まだそれほど打ち解けていない状態で行われた。まずはスタッフや大人が中心となり椅子や楽器をセッティングし、活動の準備を行った。子供たちは自分の親やスタッフに声をかけられて準備の手伝いをしたり、興味津々といった表情で楽器を触ったりしていた。そこでファシリテーターは、タイコ類と小打楽器を椅子の前や上にひとつずつ配置するだけでなく、小物打楽器が数多く入った箱を輪の中心部に設置した。子供たちは音楽づくりが始まる前より箱の周りに集まり、それぞれが色々な楽器を手にして音を出し、鳴らし方を探索していた。

１－②　久しぶりの再会をした11歳児と８歳児は親から離れて子供だけで並んで座り、11歳児が荷物の整理等で忙しそうな母親に代わり２歳児を膝上に抱いて一緒に楽器を鳴らしたりする様子が見られたが、初めてドラムサークルに参加する子供たちの多くは親の隣に座っていた。

１－③　ファシリテーターは、音楽を始める時に参加者全員に自由に楽器を交換してもいいこと、楽器と人が安全であれば音の出し方はそれぞれが工夫をして使っていいことを告げて活動を始めた。ファシリテーターは低音のドラムでシンプルなリズムを叩きはじめてグループ全体を演奏に誘った。大人たちが中心となりタイコで音楽の拍やテンポを安定させた演奏をすると、子供たちは大人や他の子供の様子を見ながら神妙な面持ちで楽器を演奏していた。母親の耳に口を寄せ何かを話しかけたり、楽器を演奏しながら母親とアイコンタクトを取ったり、母親の方から子供に何かを話しかけたりと、親子でコミュニケーションをとっている姿が多く見られた。

１－④　しばらくすると子供たちは席を離れて箱の周りに行って色々な楽器を手にするようになっていった。年長者が年少者に楽器の使い方を見せてあげたり、見つけた楽器を自身の親に見せに戻ったり、箱の周りで楽器を探索している子供を座っている大人や子供が興味深そうにじっと見守ったりする姿が見られた（写真5）。また、床に座っていた０歳９か月児が箱に近寄りミニオーシャンドラムを手にとって不思議そうな表情で楽器を探索している姿には、大人も子供も笑顔を見せ、グループ全体がその様子を見守っていた。



（写真5）

1－⑤　時間経過とともに箱の周りに複数の子供たちが集まることが減り、音楽がまとまってくると、0歳9か月児や2歳児、5歳児の年少者たちはリズムにあわせて身体を揺らしたり、マーチングバンドさながらに拍にあわせて楽器を鳴らしながら部屋の中を歩いたり、輪の中で踊ったりした。グループはそんな子供たちの様子を見つけて他の人に「見て見て」と伝えて数人で微笑んで見守ったり、「いいぞ！」と掛け声をかけたり称賛しながら動きに合わせて演奏を続けたりして、笑い声が聞こえる場面も増えていった。

1－⑥　ファシリテーターは、全体の音を聞きながら、自分の席に座って音楽の基盤になる低音のタイコ、バイーアドラムで拍を叩きながらグループ全体で次々に起こる事象を見守って過ごした。そして、全員で一斉に音楽を始めたり止まったりするストップ＆ゴーを何度か行って集団への意識を高めた。

1－⑦　その後、一人一音ずつ音を出して、隣の人とアイコンタクトを取ってまわすという音のリレーや、グループ内の誰かとアイコンタクトを取って音を飛ばす音のキャッチボールゲームを行い、参加者たちの交流を促した。子供たちは終始楽しそうに笑ったり、音の動きをじっと目で追っていたりと集中してゲームに参加していた。うまく音が次の人に繋がらないと「次は○○じゃない？」と隣の人と話したり、「（順番が）来てるよ！」と大きな声で呼びかけたりしていたが、年少者が母親と一緒にゆっくりと音をまわしている時にはじっと見守って待っていることもあった。

【第2日目】

2－①　2日目のドラムサークルは、前日にドラムサークルに参加した子供8名と大人11名に加え、1日目のドラムサークル後にキャンプに合流した子供3名と大人4名の宿泊組が朝の体操・散歩、朝食を終えた後に行われた。2日目のみ参加した子供4名と大人3名は、集合直後の活動として加わり、全33名での音楽づくりが始まった。前日より参加している子供たちは打ち解けた様子で和やかに談笑しながら参加していたが、当日参加の1歳児、3歳児や5歳児は母親の膝上に座ったり、母親の隣の席で固い表情をしての参加をしばらく続けていた。

２－②　ファシリテーターは前日の活動より参加人数が多く、音色の種類が増えて全体音量も大きくなることを考慮して、子供たちがアンサンブルの基礎になるベース音を聞き取りやすいように、大きな目立つ音のカウベルで拍を示したシンプルなリズムパターンを演奏した。グループ全体が拍を共有しはじめ、ある程度演奏がまとまり、参加者が自由に演奏し始めた頃、2歳児や5歳児が落ち着かず、席を離れたり声を出したりし、ほかの参加者の集中力も少し削がれてきた。そこでファシリテーターは輪の中心に入り、全員で速く乱打するランブルをするように指示し、全員が大きな音でランブルしたことを確認したのち、グループ全体で同時にストップした。

２－③　部屋中を震わせるような大きな音が一斉に止まった直後、ファシリテーターは参加者の楽器を指さしながら前日も行った音のリレーゲームを行った。大多数が椅子に座って一音ずつ楽器を鳴らして活動する中、椅子に座って両膝に姉妹を抱っこした母親の順番になった。両手がふさがっていた彼女は躊躇することなく、自分の膝上にいる指しゃぶりをする子供の「チュッ､チュッ」という音を声で表し､参加者全員を大笑いさせた。ファシリテーターは笑い声が収まった後も淡々と順番に１人ずつを指し、音のリレーゲームを続けた。すると順番が来ると立っている大人は抱っこした子供とユラユラ揺れたり、手つなぎした子供を誘うように両手をつないで身体を揺らしてダンスをするような動きをしてみたりと予想外のユニークなパフォーマンスを行って集団の笑いを誘った。参加者は一気に「次の人は何をするのかな？」と期待に満ちた目で音を出す人のほうを追い始め、それぞれの参加者が一音を出すことを楽しみ始めた。すると母親の膝の上にいた3歳児が自ら立ち上がり、母親から数歩離れたところから他の人の演奏を見つめたり、歩いていた子供が小走りで空いている席に座って楽器を持ち、自分のソロ演奏をはじめたりして、グループ全体が集中した状態で活動が展開された。

２－④　その後、カエルギロなど音量は小さいけれど、アンサンブルの中でずっと鳴っている音のグループソロ演奏をしてもらい、全員に異なる音色を紹介して傾聴を促した。離れて座っていた7歳児、9歳児と10歳児は、ファシリテーターに指示されると、全員が見守る沈黙の中でグラビティスティックを次々と鳴らした。「宇宙人の声みたい」なそのコミカルな音にみんなが声をあげて笑うと、互いに目を見合わせて恥ずかしそうに笑いながらその演奏を続けていた。また、並んで座っている８歳児と10歳児に２人でのタイコ演奏をお願いしたところ、緊張した面持ちで２人は演奏を始めた。すると最初から２人が息をぴったりとあわせて同じリズムパターンを同じテンポで叩いたため、グループから「おぉ～」という感嘆の声が聞こえた。感嘆の声に続き、グループ全体から拍手が聞こえると、２人は演奏を続けつつ笑顔を見せていた。その他にも６歳児が母親とアイコンタクトを取りながらも一人で演奏を行ったり、恥ずかしそうに母親に抱かれてグループに背を向けていた5歳児が、母親にフレームドラムを保持してもらい、グループに背を向けたままの状態でソロ演奏を行ったが、参加者はどの演奏に対しても温かい拍手を送り、その度に演奏者はうれしそうな笑顔を見せていた。

２－⑤　活動も半ばを過ぎると子供たちはすっかりと活動に慣れた様子を見せ始めた。すると、開始時には母親の膝上に座り抱っこされたままだった0歳9か月児や1、2歳児も一人で

椅子や床の上に座って楽器を演奏することが増えた。2歳児はギロを演奏する母親の隣に立ち、不思議そうな表情でグラビティスティックを両手で握り、しばらくじっと中を見つめていたが、母親が声をかけ手を添えて一緒に傾けて鳴らすと、嬉しそうに楽器を片手で持って走り出した。その後、彼は母親の元に戻り、母親が持っているギロにも興味を示し、不思議そうな表情で眺めた。母親がその様子に気づき、バチを持たせてみると、楽器にあいている穴の中にバチを入れようとしていた。

2－⑥　複数の子供たちが自分の楽器をじっと見ながら演奏した後に周りを見渡して、ほかの人が演奏している楽器に興味を示していた。すると1歳児が遠くの方をじっと見ながら母親から離れた方へ歩いていった。そして8、10、11歳児の演奏しているタイコに順番に近寄り、ひとつずつのタイコにそっと手を置いた。3人の子供たちはみんな一様に笑顔を浮かべ、1歳児がタイコに手を置くとその手を叩かないように気をつけて演奏していた（写真6）。8歳児の隣に座っている7歳児も、周りの大人たちもこの様子を見守りながら活動を続けた。

2－⑦　音楽は途切れることなく続いていた。参加者同士が互いの音に耳を傾けて、共有している拍を感じながら個々の表現をはじめると、音楽は崩れがたいグルーヴ感を持った。その心地よい音楽は瞬く間に全体に広がった。0歳9か月児が床の上に1人で座り音楽に合わせるかのように腰を振ったり、両手で太ももを叩いてリズムをとっている様子が見られると近くに座る者たちは微笑みながらその様子を見守っていた。

【第3日目】



（写真6）

3－①　3日目の活動は1、2日目とは異なる海の見えるピロティで行われた。2日目同様、朝の体操や散歩、朝食を終えた参加者、子供10名と大人14名の計24名は全員で楽器を運び、活動を始めた。ピロティからは海岸が見え、波が打ち寄せる音やセミの鳴く声が聞こえ、自然の中でドラムサークルをしているような雰囲気があった。この日は開始時より0歳9か月の子供以外は全員一人で椅子に座っていた。

3－②　ファシリテーターがバイーアドラムで演奏を始めると、子供たちは極めてリラックスし

た表情ですぐに拍をとらえてそれぞれの演奏を始め、音楽はすぐにまとまりを見せていた。

３－③　音のリレーを行ってもアイコンタクトを取ってからしばらく見つめ合ってふざけたり、音と音の間に長い静かな時間があってもその様子を見て笑ったりして、参加者は余韻を楽しんでいるように見えた。また、ファシリテーターではなく、5歳児が自ら隣の人にアイコンタクトをとるのをやめて、対面にいる人を見つめて「音のキャッチボール」へとゲームを発展させると、他の子供たちも自分に音をまわした人を見つめ続けて音の流れを逆流させたり、数名先の人を見つめて音を飛ばしたりと、次々と遊びを発展させていた。

３－④　自由に演奏する場面でも、ファシリテーターがグループと一緒に演奏していると、2歳児がマトラカを持ったまま輪の中心部に入って、ファシリテーターの真似をして全体を止める合図を出すと、グループはそれにこたえるように音を止めた。ファシリテーターがすかさず自席から声で合図を出し音楽を再び始めると、2歳児はリズムに合わせたように動き、今度はグループが彼の動きに合わせて演奏をしていた（写真7）。



（写真7）

３－⑤　3日目の活動は最終日の最後の活動ということで、全員一人ずつにキャンプの中で楽しかったことなどの感想を話してもらった。するとそれまでは親から離れて活動をしていた6歳児2人や7歳児が、慌てて母親に近づいて抱っこされたり、抱きつくような形でグループから顔を隠しつつ、自分で一生懸命感想を話したり、母親にインタビューされて感想を伝えたりしていた。その様子を他のメンバーは「がんばって！」と声をかけたり、発表者を見つめて話を聞いたり、拍手をしていた。どの子供たちも互いの声に耳を傾け、自分が発表した後には満足そうな自信に満ちた笑顔を見せていたことが印象的だった。

Ⅳ　考察

0歳9か月から11歳の子供たちは、ファシリテーターのジェスチャーや声、楽器での指示により、全員で速度や音量を変えたり、１－⑥や２－②のように、一斉に音を鳴らしたり止まったりして一体感を高めた。また１－⑦や２－③、３－③のように異なる音色を順番に聞きながら音のリレーやキャッチボールをしたり、２－④に記したような形で異なる楽器の演奏を聴くこともあった。これらの体験は参加者にとって、小学校学習指導要領解説（2017）にあるリズム感、強弱感、速度感、音色感などを意識し体感する経験であり、音楽の表現活動の根底に関わる音楽的感受性を育む活動であったと言えるだろう。

更に今回の活動では音楽的な体験に加えて、今後即興的音楽づくりが異年齢交流活動にいかに寄与できるかを①主体的に取り組める交流活動の準備、②他者とのかかわりから感じる自己有用感、③大人のかかわり方、の3点から考察しその可能性を探る。

1）主体的に取り組める交流活動の準備

異年齢集団の活動で問題になるのは参加者の発達段階の違いである。今回のドラムサークルでは前述のとおり、参加者全員が年齢に関係なく個々の感覚で表現しながらグループ全体に貢献し、相互行為としての音楽づくりを行った。ドラムサークルは即興的な要素を取り入れやすいので、より自由な感覚で遊ぶことが可能な活動である。しかし、大人用の楽器のみを使用した場合には、大人やそれらを上手に扱える子供たちが音楽づくりの中心になってしまう。逆に、複雑な手の操作を必要としない単純な操作の楽器ばかりを使用すると、年齢の高い子供たちは意欲を失い早々に飽きてしまったり、年少者の演奏に指導的に接してしまったり、参加者全員が低年齢の子供に合わせた子守感覚の活動になってしまうことも考えられる。異年齢集団で就学前の子供が参加する場合には、幼稚園教育要領解説（2008, p.147）の「表現」の留意点にもあるように「材質、形態、使いやすさなどを考慮し、幼児の発達、興味や関心に応じて様々な表現を楽しめるように（遊具や用具を）整備すること」は必要不可欠であると考えて準備した。

その結果１－④や２－⑤のように子供たちは様々な楽器を触り試行錯誤した後、自分で操作できる楽器を選択していた。そして一人ひとりが活動の中心となって意欲的に演奏し、時には周囲の人たちの奏法を見ながら自身の表現を広げたり深めたりした。さらに奏法だけでなく周囲の音やリズムと自身のリズムの関係に気がつくと、やりとりの中から創発的な音楽表現がうまれていた。異年齢交流の中での乳幼児・幼児と小学生の関係は、小学生の方が楽器の演奏スキルも高く音楽的な知識も豊富であるという意味でもちろん対等ではない。しかし、ドラムサークルでは発達段階を考慮した楽器を準備、使用することで参加者同士が一表現者として対等な関係を築き、年齢に関係なく参加者全員が主体的に音楽づくりに取り組んでいた。また、乳幼児・幼児は音楽的な知識が少ないからこそ、常識に縛られない全身での表現が生まれていた。彼らのダイレクトに音やリズム、振動に触発された素朴でエネルギッシュな動きやリズムは、見る者を魅了し笑顔を引き出すだけではなく、参加者が個々に演奏している音やリズムを触発して音楽づくりに生かされていた（１－⑤、２－⑦、３－④）。すべての参加者が年齢やスキル、知識にとらわれることなく一表現者として対等に、そして主体的に参加し、一体感や仲間意識を自然に育てられるド

ラムサークルには、発達段階を考慮した楽器の準備が必要不可欠な要素であることを再認識させられた。

２）他者とのかかわりから感じる自己有用感

自己有用感とは他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受けとめる感覚のことである。そしてそれは、１）存在：他者や集団の中で自分は価値のある存在であるという実感、２）貢献：他者や集団に対して自分が役に立つ行動をしているという状況、そして３）承認：他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況という三要素から構成されている（栃木県総合教育センター、2013）。

今回の即興的音楽づくりにおいて、子供たちは意欲的に楽器を選び奏法や表現に工夫をこらして他者とそれを共有していた（１－①④）。ドラムサークルでは、参加者全員が大きな輪になって座っているため、視覚的に自分が集団の一員として存在しているということを容易に確認できる。そして自らが奏でる音やリズムが、アンサンブル全体の中で存在しているということを聴覚からも実感できる。その個々の存在や貢献をより際立たせ、全体の音楽の中で弁別できるような気づきと聴覚を育てるために、１－⑦、２－③、３－③で行った音のリレーやキャッチボールは有効な手段であったと考えられる。また、２－④のようにファシリテーターが選び小グループでの演奏をしてもらう場面や１－⑤⑦や２－⑥⑦、３－③④⑤のように自発的に子供たちが音楽表現や身体・言語表現を行ったり活動の展開をはじめて集団への貢献を行ったとき、グループは大人、子供に関わらず、気がついた者が口々に肯定的なコメントをしたり、称賛したり、笑顔でそれらを承認し、すぐにその貢献を音楽や活動の展開へと活用していた。

即興的音楽づくりの活動では、子供たちの「存在」から生まれた音や表現は、異なる音色やリズム、音量といった音楽要素としてすぐにアンサンブルに「貢献」し、その貢献は集団が奏でている音楽という形で音が鳴り続けている間は絶えることなく演奏者を「承認」し続けている自己有用感を感じやすい活動ではないかと考えられる。

３）大人のかかわり方

今回の活動では音楽の演奏場面に限らず、すべての活動において、大人の存在と子供たちを見守る眼差し、安定した音楽が子供たちの支えになっていることを感じさせられた。例えば、子供たちは１－②③、２－①のように新しい場所や人に出会うと緊張と不安を見せ、しばらくは親の膝上や隣席で過ごしていた。しかし、大人が中心となり安定した音やリズムを奏でて部屋全体を振動が包み込むと、子供たちは穏やかな表情を見せ、親から離れて周りに興味を向けていた。また２－④や３－⑤のように個々が目立つ活動に接したり、不安要因が何かあると子供たち、特に低年齢の子は親の近くへ行き、スキンシップをとったり声をかけてもらったりしてから気持ちを安定させ、課題に取り組む気力を自分の中に溜めて、再度親から離れて活動をしていた。短時間母親と言葉を交わすだけでまた自分の演奏に戻る子もいれば、母親に手をつないでもらったり、抱っこしてもらって一緒に活動を続け、少しずつ自分一人で活動に取り組む子供もいた。子供にとって「ただ親がそこにいる」ということ、不安な気持ちをかかえても父親や母親、大人に受容してもらうことが大いなる安心感と、新しい場所や人、楽器や活動へと向かう力を与えているこ

とをひしひしと感じさせられた。同時に6、7歳以上の子供たちは不安になっても父親や母親と離れた場所からアイコンタクトを取るだけで気持ちを落ち着かせて課題に取り組む姿を見せることもあり、親にとっても子供の成長を感じられる瞬間であったことと推察するが、いずれにしても信頼できる大人の存在は、乳幼児や幼児を含む異年齢交流において必要であったと思う。

また、滝（2006）の言う「大人の支える・見守る」姿は、子供たちの自然な交流や主体的に活動を展開していく場面において、有益であることを感じさせられた。スティーヴンス（2003）はドラムサークルの基本原則の一つに「There is no right or wrong（ドラムサークルには正解も不正解もない）」ことをあげて、ドラムサークルという場が安全で寛容な探索の場であることをあげている。今回の活動でも１－③のようにファシリテーターは参加者に「楽器と人が安全であれば自由に演奏してもいい」という緩やかな枠組みを提示した。その言葉を受けて、参加した大人たちは１－④や２－⑤のように楽器を探索する子供たちを見守っていた。そして、２－⑤のように2歳児が親の方をチラリと見て援助を求められると手を貸していた。また、２－⑥の1歳児が8、10、11歳児のタイコに興味を示して近寄り手を置いた時のことを、1歳児の母親は「『やめて、触らないで』でもなく、『赤ちゃんが来たから○○してあげなくちゃ』でもなく、そのまま（子供たちが）交わっている感じが印象的だった」と子供の様子を見守っていたことを話している。これも自分のそばを離れた子供を母親が見守っていたからこそ生まれた自然な交流例であると思う。子供自身の持っている思いや力を積極的に活かそうという視点を大人が持っているからこそ、子供が育つ機会は保証されるのだと感じた。

子供たちにすべてを任せて放っておくのではなく、求められ、子供たちが大人を必要とした時に、そこに存在し、手を貸せるように見守ることこそが、子供たちの育ちを支える大人に求められるかかわり方なのではないかと考えられた。

Ⅴ　まとめ

本研究により明らかになったことは次のとおりである。

1. 発達段階を考慮した楽器の準備・使用により、乳幼児・幼児・児童の表現は対等なものとなり参加者は主体的に即興的な音楽づくりを通した異年齢交流活動を行うことが可能となる。
2. 即興的音楽づくりでは、楽器を介した他者との自然な交流、個々の音楽表現が全体の音楽に貢献する体験を通してすべての年齢の参加者が自己有用感を感じることが可能である。
3. 大人が見守り、支えることが参加する子供たちの情緒を安定させ、主体的な参加や他者との交流を促進することを可能とする。

Ⅵ　おわりに

本研究では、即興的音楽づくり、ドラムサークルの乳幼児・幼児・児童の社会性の育成を目指す異年齢交流活動としての可能性を探ってきた。その結果、従来の異年齢交流活動で年長者が年少者と接することで自己有用感を高められるという結果と異なり、即興的な音楽表現だからこそ

年少者も年長者も対等な関係で集団に貢献することができ、それぞれが自己有用感を感じられる可能性があることが明らかになった。

音楽の三要素、リズム・メロディー・ハーモニーの中でもリズムは発達段階の早いうちから子供たちが感じ取っている要素だと言われている。梅本（1999）は「子どもと音楽」の中で、生物が木の葉のゆれや月の満ち欠け、心臓の鼓動や肺の呼吸などのリズムに満ちた環境に適応する基礎にはリズム同期があることを述べ、「同期できること自体が、生物にとって一種の喜びや快感であるからこそ、同期への力が自然に働くのであろう」と記している。そして「リズムの同期は乳児の成長にとって本質的なものであるだけでなく、幼児期にも児童期にも、さらに青年期から成人の生活にとっても、本質的なものである」としている（p.60−61）。

今回のドラムサークルの中でも、参加者同士が互いの音に耳を傾けて、共有している拍を感じながら個々の表現をはじめると、音楽は崩れがたいグルーヴ感を持った。その心地よい音楽は瞬く間に全体に広がり、参加者全員が同期している状態になった。そして、２－③のように大人たちが子供たちと本気で遊び、楽しさや笑いを共有していた時、そこで行われていたのは子供たちの異年齢交流ではなく、参加しているすべての人達の異年齢交流の活動であったと思う。梅本の言うようにリズム同期が私達人間にとって本質的なものであるからこそ、即興的な音楽づくりはすべての参加者が自然と交流し、一体感や仲間意識を感じながら遊べる活動になったのではないだろうか。そして、それこそが現代社会で減少している多様な人間関係を体験できるコミュニティの活動であったと思う。

本論文では、即興的音楽づくりの異年齢交流としての可能性を検討した。その過程で、参加した子供や子供たちの親の視点から自己有用感についてどのように感じているのか、参加人数が増えた場合の方法論や継続例での効果などをさらに検討する必要があると思われた。また、ドラムサークルは地域づくりの活動や育児支援活動への発展につながることも考えられる。今後は本研究の成果が子供たちの社会性の育成に寄与できるよう実践を重ねていくとともに、異なる視点からの研究も続けていきたい。

終わりにあたり、ご多忙にもかかわらず快く本研究に助言と励ましをいただいた高橋一行先生に深く感謝したい。また、映像や写真の使用を許可していただきキャンプに参加してくださった子供たちと保護者の皆様、プログラムの企画・実施、本研究にもご協力いただいたNPO法人えんぱ和メントの皆様にも心より謝意を表したい。

引用文献

Christine Stevens（2003）. *The Art and Heart of Drum Circles*　Milwaukee: Hal Leonard Co.

アーサー・ハル（2004）.『ドラムサークル・スピリット』佐々木薫・速水葉子・増永紅実訳，株式会社ATN.

梅本堯夫（1999）.『シリーズ人間の発達Ⅱ子どもと音楽』東京大学出版会.

クリスティーン・スティーヴンス（2004）.『アート・アンド・ハート・オブ・ドラムサークル』石井ふみ子訳，株式会社ATN.

滝充（2006）.「『異学年交流』『地域交流』こそ育成の要諦―徹したい教師の『学習支援』―」『CS研レポート』58号　pp.26-31.

栃木県総合教育センター.「高めよう！自己有用感」インターネット，

http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/pdf/h24_jikoyuyokan_all.pdf（2017/12/18にアクセス）
長坂希望（2012）.「学童保育における音楽療法的活動の試み」『東京立正短期大学紀要』40号　pp.87-101.
文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領解説』
文部科学省（2008）.『幼稚園教育要領解説』

参考文献

Arthur Hull（1998）. *Drum Circle Spirit -Facilitating Human Potential through Rhythm-* Reno:White Cliffs Media co.
片山順子・他（2004）.「親子関係支援としての音楽表現・やりとり遊び―保育所における地域子育て支援の内容と方法」『九州女子短期大学紀要』41号　pp.27-38.
菅裕・他（2011）.「音楽科における異年齢集団学習の試み（3）」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』19号　pp.97-104.
高橋一行（2007）.「楽譜のない音楽創りの考察―アフリカ音楽から幼児音楽教育をさぐる―」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第4号　pp.71-82.
藤巻真由美（2006）.「乳幼児の音楽遊び」『帝京学園短期大学研究紀要』14号　pp.31-38.
文部科学省国立教育政策研究所（2011）.「子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』―活動実施の考え方から教師用活動案まで―」
文部科学省「子どもの徳育に関する懇談会」インターネット,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm（2017/12/10にアクセス）